

# 幻卷における紅梅

高橋 沙子

## 序

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におはします。

(「幻」一・五二二)

幻卷の冒頭部である。幻卷はその語り出しから、周囲あるいは他者に融合しない隔絶された空間に光源氏を描き出す。

いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを飽かぬことに思す人々もありけるに、

(「胡蝶」一・一六九)

物語中三例しかない「春の光」はかつて、「春」を掌握し、その「光」を内なる輝きとして邸に執り込んできた六条院を象る言葉として選ばれ、ここにきてその威光を喚起させながらも、もはやそれとは明らかに異なる「春」が、今、再びこの六条院に巡ってきたことを示唆している。尚、もう一方は後に宇治十帖にて、大君を亡くした冬からそれでもなお巡り来る春として、(「甦る季節を際立たせ、大君と死別して月日の経過にさえ気づかぬ中の君の悲嘆を語る」方法として

もう一度「春の光」が反復させられることとなるのである。

藪しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむ と、夢のやうにのみおぼえたまふ。

(「早蕨」一・三四五)

幾度も再生し、甦り、巡り来る「春」は、二度と帰らぬ者をより際立たせる存在として、定義付けられ、語られる。

「春の光」(新春の光)に輝きを増すはずの光源氏には、もはやかつてのような輝きはない。そればかりか、その光が一層光源氏の心を「くれまど」わせる。ここでは、「春」がすばらしければすばらしいほど、また「光」がまばゆければまばゆいほどに、その作用は反転して失きもの大きさへと変えられていく。「改まるべくもあらぬ」光源氏とは裏腹に年改まり、例ならぬ光源氏の心中を余所に「人々」は「例のやうに」年賀に参る。光源氏は御簾の「内」にばかりおり、完全に「外」から孤絶しているのである。

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひの吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。

(「初音」二・一四三)

季節と呼応し、共鳴し合い、共振していくかつてのような六条院の姿はここにはない。

## 一、懐旧の香

兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはんとて、御消息聞こえたまふ。

(「幻」一・五二二)

続く、螢兵部卿宮との贈答の場面も、六条院での華々しい薫き物合わせでの一幕を喚起させる紅梅とともに語られていく。

御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。(中略)

昔よりとりわきたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのことと聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、

(「梅枝」二・四〇五)

昔から、共に風流を愛であつてきた友の変わらぬ来訪に光源氏も心を許し、「隔てなく」接することを試みるが、この対面は明らかならず、違いに終わり、二人がかつてのような紅梅を介しての心の交渉を持つことはない。それどころか、これら、過ぎし日とは少しも変わらぬものたちが、変わり果てた何かをより明白に、光源氏に見せつけていく媒体となっていく。

わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん  
(「幻」一・五二二)

光源氏の詠んだ贈歌は、もはや花をもてはやす人(紫の上)もないこの寂しい宿に宮(春)は何故にわざわざ尋ねくださったのかといった意であろう。光源氏の心中を余所に、無情にも変わらぬ訪れ続ける「春」に宮を重ねるようにして、変わり果ててしまった我が心の寂しさを訴えかけたものともいえよう。それを受けた宮はこう返歌す

る。

香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりと言ひやなす  
べき

(「幻」一・五二二)

あなた(梅の香)こそを尋ねて来たというのにその甲斐なく通り一遍に立ち寄っただけとおっしゃるおつもりですか。源氏を訪ねて春をとりわけ謳歌しなかったのにと切り返したわけである。「花」が染みる光源氏の訴えの贈歌に、「花」を謳歌しに来たと主張する宮の返歌は畳みかけるように光源氏を孤独にしたに違いない。<sup>(2)</sup>

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのいとなつかしきにぞ、これより外に見はやすべき人なくやと見たまへる。花はほのかにひらけさしつづ、をかしきほどのにほひなり。御遊びもなく、例に変わりたること多かり。

(「幻」一・五二二)

光源氏の視線は紅梅ではなく、その紅梅に歩み寄る宮を静かなまなざしで傍観している。ここで再びあのかつて(薫き物合わせの折)の梅花の花見場面を思い起こしてみたい。

月さし出でぬれば、大御酒などまゐりて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨のなごりの風のすこし吹き  
て、花の香なつかしきに、殿のあたりいひ知らず匂ひみちて、  
人の御心地いと艶なり。

(「梅枝」三・四一〇)

「これより外に見はやすべき人なくや」とは、無論、紫の上の喪失を暗に意味しているのであるが、同時にまた、光源氏自身がこの風流人と思いを同じくし、かつてのように「艶」なる心地で共に紅梅を愛

でることが、今も、そしてこれから先もあり得ないことを自覚する  
営みでもある。梅枝巻での花見の場面は、この後、梅の香に添うよ  
うにして「御遊び」が「おもしろく」響き合い、「雲居とほるばかり」の  
更なる演出が施されていく。

蔵人所の方にも、明日の御遊びのうち馴らしに、御琴どもの装束  
束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞  
こゆ。内の大殿の頭中将、弁少将なども、見参ばかりにてまか  
づるをとどめさせたまひて、御琴ども召す。宮の御前に琵琶、  
大臣に箏の御琴まゐりて、頭中将和琴賜りて、はなやかに掻き  
たてるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将横笛吹きたま  
ふ。をりにあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁  
少将拍子とりて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし。

〔梅枝〕三・四一〇

この、梅の香と楽の音との共演は初音巻にも見られ、繰り返し六条  
院の威光を形付ける装置となっていた。

花の香さそふ夕風のどかにうち吹きたるに、御前の梅やうやう  
ひもときて、あれは誰時なるに、物の調べどもおもしろく、  
「この殿」うち出でたる拍子いとはなやかなり。大臣も時々声う  
ち添へたまへる「さき草」の末つ方、いとなつかしうめでたく聞  
こゆ。何ごとも、さしいらえたまふ御光にはやされて、色をも  
音をもますけぢめ、ことになん分かれける。

〔初音〕四・一五二

眼前に広がる風景は少しも変わることなく、「春」は今年も巡り、  
「花」を「ほのかにひらけさしつ」例年に負けることのない「をかし  
きほどのほひ」を湛えている。それだけに、共鳴し合うはずの「御

遊び」の欠落が、光源氏の傍らの寂しさを一層際立たせる。

幻巻の語り出しは、「例のやう」な景色を描きつつ、「例に変わりた  
ること多かり」として結ばれる。昔とは同じであって同じではない  
春。ただ、変わらずに在り続ける自分。そしてそのことを何よりも  
喚び起こさせるのは、他でもなく梅の香の存在である。

この巻頭部には引歌さえ記されてはいないものの、『伊勢物語』第  
四段を彷彿とさせるに足る風景が描かれているとは言えないだろ  
うか。

またの年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひていき、立  
ちて見、ゐて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣き  
て、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思  
ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身  
にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

〔伊勢物語 第四段〕

この歌を直訳すると、<sup>(3)</sup>「月は違っているのだな、春は昔の春では  
ないのだな。我が身一つだけは昔のままの身であって」ということ  
になる。では、この歌の真意とは一体何なるものであったか。月  
も、春も、昔と変わるはずはない。つまり、「月は変わってしまった  
のか、いやそんなはずはない」「春は昔の春ではないのか、いやそん  
なはずもない」のだ。変わらぬ風景の中で、変わり果てたものとは、  
他ならぬ「わが身一つ」なのである。我が心の変貌こそが本来変わり  
得ぬものの姿まで変えてしまったのである。

幻巻の巻頭部は、梅香を巧妙に操ることで、眼前の春と「昔」の春

とを二重に映し出し、その歴然たる差異を露呈させる。そして「昔男」が、幾度も視座を変えて、「立ちて見、居て見」と、目前の「春」を捉え直そうしたように、また、それが決して叶わなかったように、そこには主人公自身の視線の変貌が窺える。しかし、光源氏はこの「昔男」のように、自邸へと泣く泣く「帰る」わけにはいかないのである。こうして、幻巻は以降もこの異質な感覚のまま、これまでとは同じであつて、似るべくもない季節が追われていくこととなるのである。

## 二、二つの紅梅

幻巻が一年という区切られた「現在」を追いながら、幾重にも渡る「過去」を繰り返し掘り返しつつ、光源氏物語を総括し、終焉へと向けられていく中で<sup>(4)</sup>、尚、変わらずにあり続けるものの存在は光源氏にも読者にも齟齬の念を抱かせる。主人公の死が即ち「時間」の終わりではない。そのことはまた、紫の上の死後、誰よりも光源氏自身が痛感してきたことでもあつた。<sup>(5)</sup> 季節は主人の顔など見向きもせずに「知らず顔」に巡り続けるのである。

そのように「未来」へと流れるわずかな枠の中に、匂宮の存在もまた描き出される。死を目前にして、紫の上は死後、即ち自分の亡き後の時間を匂宮に託そうとする。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にも奉りたまへ」

〔御法〕五・五〇三

自分の死後も、変わらずに在り続けるであろう「紅梅」と「桜」を、同じくその行く末を見届けることのできない「見さしきこえたまはん」「この宮」に委ねるのである。それは無論「口惜しくあはれ」なことには違いないが、これら「未来」へと繋がっていく存在は、「未来」を持たないものにとつて幾分かの慰めでもあつたに違いない。

さて、この紅梅と桜であるが、その後、それらが遺された者の心にどう響いていったのか、紫の上の死後、その面影が鮮明に残る幻巻にて追つていきたいと思う。

光源氏は幻巻において、さまざまに自然に紫の上を映し出し愛惜を深めていったわけだが、中でもとりわけ情感をそられるのが春であつた。春は紫の上が最も愛でた季節であり、その主人として管理し、支配した季節でもあり、また紫の上自身が春の化身のような美しさを放っていたわけであるから、故人と最も縁があり、思い出深い春が哀傷の季節として選ばれるのはごく自然なことでもある。だが、思い返してみると、紫の上は生前花の喩においても、語られる風景においても、常に最も色濃いイメージとして桜を着せられてきた人物でもあつた。そしてまた、花といったら即ち桜を意味するように、春を最も代表する景物も、まず、桜を外して他にはあるまい。

しかし、幻巻は光源氏の心を最も揺さぶる景物として、また、春を感じさせる媒体として紅梅を選び取っている<sup>(6)</sup>。

I わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん  
(中略) 紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのいとつかしきにぞ、これより外に見はやすべき人なくやと見たまへる。花はほのかにひらけさしつづ、をかしきほどのにほひなり。

〔幻〕一・五二二

Ⅱ「母ののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見  
ありきたまふを、いとあはれと見たてまつりたまふ。二月にな  
れば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしく  
霞わたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でた  
れば、立ち出て御覽ず。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来る鶯

〔幻〕五・五二八

Ⅰ、Ⅱにおける紅梅は、果たして六条院のものなのか、それとも二  
条院のあの紅梅の木なのか、それは即ち幻巻の舞台が何処であるの  
かという問題として、多く論じられてきたところでもある(7)。だ  
が、ここでは幻巻の舞台は六条院であるという立場をとることとす  
る。やはり、それは光源氏世界の象徴であり、また、(四季)を極め  
て意識した構造を持つこの邸を、まるでそれ(四季)、つまり(時間)  
そのものを支配しているかのように巡り歩いた主が、幻巻におい  
て、ただ独り(時間)に取り残され、今度はその主人の周りを「知らず  
顔」にて、決して「時を忘れ」ることなく、季節がカラカラと巡り続け  
るその愕然とするような現実こそが、また、長年身も心も寄り添  
い、連れ添ってきたはずの夫婦、光源氏と紫の上が、我が邸と思  
い、最後に帰る場所に差異が生じてしまっている事実、やはり意味が  
あると思うからである。

以上のように考えると、「わが宿は花もてはやす人もなし」と詠つ  
た、最初の春を告げる「紅梅」は、六条院のそれであり、かつて螢兵  
部卿宮と共に四季の薫りに優劣をつけ、春の色香を愛であった梅枝  
巻を思い起こさせる紅梅の香であったわけである。では、季節の浸

透が時間の流れを語るようにして移ろいを感じさせていく幻巻にお  
いて、再び繰り返し同じ「紅梅」(Ⅰ、Ⅱ)が語られるのは何故か。

それは、Ⅱの場面において語られる「紅梅」こそ、紫の上の紅梅で  
あるからではないか。「母ののたまひしかば」とて、対の御前の紅梅  
とりわきて後見ありきたまふを、「御形見の紅梅」とはつきりそれか  
と分かるようにして語られるこの「紅梅」は二条院のあの紅梅である  
ことに疑う余地もない。つまりは、ⅠとⅡでは同じ「紅梅」を語りつ  
つも、その舞台は異なるものとなっているのである。よって、ここ  
では「わが宿」に対して「植ゑて見し花のあるじもなき宿」なのであ  
る。

紅梅の香が、一際懐かしさを覚えさせ、また「あるじ」の不在を感  
じずにはいられなくさせるのは、それが「梅」であり「匂ひ」であるこ  
とが、実は思いの外重要なのである。梅香が懐旧の情を誘うことは  
『伊勢物語』等を挙げて、前述でも触れたが、また、目に見えること  
のない「匂ひ」は空間を越え得るかのように、こんな歌を生んでい  
る。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな

(拾遺集・雑春・一〇〇六・菅原道真)

これらと、この幻巻の季節感、無縁のものではあるまい(8)。ま  
た、「紅梅」を託された「三の宮」が、後に「匂う」宮として成長してい  
く点も興味深い。

## 三、桜

では、紫の上遺愛のもう一方、「桜」は一体どうしたか。最後にその行方を追っておきたい。

Ⅲ 外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤はおくれて色づきなどこそはすめるを、そのおそくとき花の心をよく分きて、いろいろを尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れずにはひ満ちたるに、若宮、「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立て、帷子を上げずは、風もえ吹き寄らじ」と、かしこう思ひえたりと思ひてのたまふ顔いとうつくしきにも、うち笑まれたまひぬ。

(「幻」五・五二九)

この場面もまた、Ⅱと引き続き二条院とする説がある。それはやはり、匂宮の発言(「まろが桜……」)の解釈に拠るところも大きいであろう。だが、「春深くなりゆくままに」という時の変化を挟んでおり、六条院の春を語る場面(例「他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほ笑み、廊を繞れる藤の色もこまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり(「胡蝶」一・一六七)»)などとも符合していることから、この場面は通常通りの六条院にてのものとも考えられ、ここではそのように解することとし、匂宮の「桜」を巡る言動を別の角度から問題化してみよう。

桜を「わが桜」と称し、その美しさを讃え、風さえも吹き入れぬようにと、外敵から守ってあげようとする匂宮の姿勢には、桜への愛情が感じられる。だが、一方でその形は、美に執着し、一切から遮

断し、管理し、所有しようとする支配的な姿でもある。「かしこう思ひえたりと思ひてのたまふ顔いとうつくしきにも、うち笑まれたまひぬ」と、光源氏は、そんな匂宮の姿に、思わず笑みをこぼしている。自然は決して管理することなどできないこと、また支配することの錯覚と無意味さを知る、老成した光源氏にとって、匂宮の若さは、愛おしむべき純粹さであり、また知らぬが故の、まるでかつての自分を彷彿とさせるような、そのような風景だったのであろう。

このことは、(「静心なく花の散るらむ」)などからも代表されるように、古来から散ることを惜しまれ、どうにかしてその美しさを我がものが、自分のものとして手元に置いておきたい、また静止させておきたいと、思わせずにはすまされない「桜」そのものの宿命とも言えるかもしれない。そしてそれを象徴するかのようなこの幻巻での描かれ方も、終生紫の上が他でもないこの「桜」に喩えられ続けてきたことも、また、偶然ではあるまい。

## 結

今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を  
人やりならず悲しう思さる。

(「幻」五・五三〇・Ⅲに続く場面)

現世に独り取り残されてしまったことを嘆いてばかりいた光源氏は、ここに来て、俗世を顧みる。「紅梅」の香が懐かしさを運び、寂しさを顕わにしたとするならば、「桜」の美しさは目に見える移ろいとして無常であることの悲劇と宿命を喚起させたに違いない。

幻巻に終始漂い、過去の記憶を喚び覚ます紅梅の香は、その後「春

や昔の」を引き歌にしながら、宇治の物語へと引き継がれていくこととなるのである。

※ 本文は小学館新編日本古典文学全集による。

註(1) 新日本古典文学全集4・P三四五・注一参照。

(2) 小町谷照彦『幻』の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ―(『源氏物語の歌ことば表現』所収 昭五十九 東京大学出版)には、螢兵部卿宮との贈答場面について、「両者の歌はそれ自体贈答の形だけは成しているが、各々向いている所は別であって、お互いの気持ちの交渉はない。言葉の表現する形式と内容との離反を示しているのが、この贈答の構造である」との分析がある。

(3) 大野晋「月やあらぬ春や昔の春ならぬ(下)」(学習院大学上代文学研究1 4 平元・三三参照。尚、「月やあらぬ」歌は特に上の句の「や」(疑問か、反語か)をめぐる、解釈が揺れている。(中西宇一「月やあらぬ」―業平歌一首の解釈「女子大國文 第四十九号 昭五十九・二」、工藤重矩「月やあらぬ」の解釈―方法として)(中古文学 昭六十一・六)等、参照。)また、「従来のように、疑問だとか反語だとか言って理屈っぽく騒いでいては、業平の格の大きい、力強い歌はわからないのである」(片桐洋一『鑑賞 日本古典文学5』 昭五十五・十一 角川出版)との解もあるが、ここでは「昔男」の感覚に比重を置きたい。

主体である「昔男」には月も春も違って見える(疑問)。だが、それは主観であって、客観(読者)には「そんなはずはない」(反語)のである。その複合性とズレ―主体の眼の変貌こそがこの歌の面白さであり、また幻巻が抱き込みたかった感覚であると考える。

(4) 幻巻の(時間)の特異性については、既に優れた論考が多い。

神野藤昭夫氏は「源氏物語の時間表現―幻の巻のことなど―」(国文学 昭五十二・一)で、「重層化した時間の堆積が今の光源氏を支え、過去が現在と交響し、過去がさながらの過去とは別の相貌を帯びて現代的に甦生してくる、ということがあるのではないかと、その「時間表現」に注

目しており、松井健児氏も「幻巻の十一月―光源氏と五節舞姫」(国語と国文学 昭六十三・一)において、特に「十一月」に着目しながら、その描かれざる過去を手繰り寄せつつ、「幻」巻の月次の表現とはたんに歌による悲哀のモザイクなどではなく、さながら平面分割と色彩の重層性によつてのみ、全的統一性を示そうとする、ある種の抽象絵画を思わせる」と、その時間構造について言及している。また、高橋文二氏は「思い出」の中の官能性―「手習」巻と「幻」巻の表現をめぐる―(『源氏研究 第二号』 平九・四 翰林書房)において、「この巻ほどあらわに喪われた過去の時空間と対話をする巻や個所はこの物語のうちにはほかにない」と「思い出」の意味を問い直しつつ、思い出すという行為に支えられ、過去の時空間へと向けられるこの巻の特殊構造を指摘する。

(5) 幻巻における季節感とは、三田村雅子「知らず顔」の自然(『源氏物語―物語空間を読む』 平九・一 筑摩書房)の解釈に示唆される点が大大きい。三田村雅子「梅花の美」―回想の香―(『源氏物語 感覚の論理』 平八・三 有精堂)は、「咲きこぼれる紅梅の精粹を抽出したような梅花の香と、紅色の鮮やかさがともに紫上の資質を象徴し思い起こさせるものとなるのである」と回想の中の紫の上が紅梅の人として造型されていることを指摘している。

(6) 二条院説には、後藤祥子「哀傷の四季」(『講座源氏物語の世界 第七集』 昭五十七)等がある。

(7) 倉田実「二条院の紅梅」―紫の上の最期をめぐる―(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 御法・幻』 平十三・十一 至文堂)では、「東風吹かば…」を挙げ、紅梅を「(ア)宿の主人を表象し、また、(イ)形見ともなり、(ウ)人が目指して訪れる景物であった」と説く。

(8) 「ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ」

(古今・春下 紀友則)

渡辺秀夫「梅花の記憶―業平「月やあらぬ」歌の古典主義的構造―」(『日本文学』四二一六 平五・六)は、桜の特性について「もっぱら『散る』という凋落・衰亡の相において捉えられ、それはそのまま老いや死の観念を直感的に想起させる」とする。

(本学博士前期課程)